

11月8日 (水曜日)

松本道弘民俗学めざめの地 (中瀬邸)

—柳田國男民俗学発祥地—

この夜寄しくもNHKが「その時歴史が動いた」(テレビ)の中で「柳田國男—遠野物語」を放映する。なんとという奇縁。今朝のクニ子女史が映っていた。

塩あればおのごろできる山の村(くに)

椎葉クニ子女史(83)「塩があれば、この集落は自給自足できる」綾部正哉氏(65)は、塩出(しおで)の木が付着するから、日本が沈んでも椎葉村は沈まらぬとあって、平家焼塩を見せてくれたが、地場製品の売場の人によれば、これは海の粗塩で、塩に関しては海の協力がいるとのこと。山の幸を馬の背にした駄賃つけ達は、峠を越えて熊本に出かけ、戻りに塩と酒を運び、帰りに駄賃を手にした。今の金にして往復2万円。

～おどま駄賃つけ、駄賃さえあればよ、

親子三人口や、寝て暮らすよ

(椎葉駄賃つけ唄)

焼畑は自然が教える耕育道

国の宝、クニ子女史(語り部)は「いくら機械化し、世の中がいくら便利になっても、5500年も続いた焼畑の知恵には勝てぬ。除草除虫剤など要らない、肥沃な土から健康な穀物が生まれる」という。60年間欠かさず焼き畑を続けてきたクニ子女史はまさに神の声だ。耕育の道だ。ダムができるまではランプで書き読み、村人は電気の時代の人よりもっと勤勉だったという。1年目はソバ、ムギ(7～8月の火入れから10～11月には収穫・乾燥・脱穀)。2年目は5月にヒエの種蒔き、6月にムギの収穫、アワの種蒔き、10月～11月に収穫。

3年目は4月にサトイモの植付け、5～6月はアズキ、9月ダイコン、10～11月収穫。4年目は4月にサトイモ植付け、5月6月にダイズの種蒔き、9月ダイコン、タマネギ、10～11月収穫。5年目は少し休ませる。土にも残心を怠らぬ気配りが要る。このリサイクル農耕こそモッタイナイの精神だ。選地輪作ともいう。

このヤボに火を入れ申す

蛇、ワクド、虫ケラ 立ち退きたもれ

山の神、火の神、お地蔵様、どうぞ火の余らぬように

又、焼け残りのないようおん守り あったもり申せ・・・ 焼畑の唄

追う者と追われる者とが結ばれる椎葉の道はかんながら

平家の娘、鶴富姫と源氏の追討使・那須大八郎宗久の悲恋は日本民族の「和」の原点と思える。九鬼嘉隆を受け容れた答志島の漁民の心意気と一脈相通じる。共通項はムラであろう。椎葉村の男が選ぶ女は同郷と仲良くやってくれる嫁——つまり地縁と血縁の結びつきが優先する。差別はない。ムラの「和」である。綾部和尚は、外者ながら根を下ろしつつあり、地元からも崇敬されている。5年7ヶ月無料奉仕を続けられているが、宿泊者が増えると地元の人が匿名で何らかの形でお布施をしてくれるという。お金の要らない自給自足の生活ができる。

英治殿、来なくて良かった、ダム現場

日本初のアーチ式ダムと喧伝された上椎葉発電所は5年かけて昭和30年に完成された。最初に犠牲者を出したこのダム（110メートル）は、市釜（しもうけ）ダム（大分）、一ツ瀬発電所（宮崎）に影響を与えた。105名の殉死者を出したこの無人発電所は、かつて私が調査した佐久間ダムを思い起こさせ、胸がしめられる思いがした。作家、吉川英治が日向椎葉湖と名付けたというが、この地域は訪れてないという。九州電力の広告塔として使われる前に彼は没している。徳山ダムがダム建設を **strategy** とするなら、調査だけと油断させるのが **tactic** である。このダムの調査も4年前から始まっていた。中瀬淳（スナオ）元村長の机に置かれたタバコの箱の中には多額の札束がぎっしり詰め込まれていた。村長は馬に乗って行ってワイロを返したという。中元暢一氏から伺った。当初からカネが動いた。蜂の巣城のダムの巖窟王を産んだのも、この上椎葉ダムの悲惨な現状を知ったからである。巖窟王もカネで転ばなかった。濁緑色で生気のないダムの貯水池のほとりをドライブしていると、ムカムカする。英語で怒鳴りたくなる。**Take it down!**（ぶっこわせ！）韓国ではダムの取りこわしが始まっている。どうして日本ではまだ騒がないのか。徳山ダムも押し切られてしまった。海は泣いている。2年前の台風で、椎葉村は180億円の損害を出した。年間予算（50億円）の3倍以上の財源が吹っ飛んだ。私の調査ではダムがなければ、こんな被害はなかった（黒木勝美氏の話による）。土砂崩れは保水力の弱い杉林ばかりだ。これは植え付けに助成金が出る。補修工事の仕事があるかぎり、村は食っていけるという。何かが狂っている。柳田國男なら思うだろう。「古代の椎葉村の人たちは、祭りそのものがビジネスだったはずだ」と。

この部屋で柳田が寝たかも中瀬宅

ここは柳田國男民俗学発祥の地との案内板が立っているが、黒木勝美氏（元役場助役）は柳田氏は自分の父の家（今はダムの湖底）に2泊したが、中瀬宅には寝ていないという証拠を見せてくれた。綾部氏は反論する。当時この邸にいたのは中瀬沂（のぼる）少将と5人の女（雪、春、松、重、末の5人）で昨年104歳で亡くなった重は、「父にこの部屋は柳田先生がいるから近寄るなといわれた」ことをはっきり覚えていたとのこと。私が中

元氏と一泊した部屋に柳田國男氏が居たことはたしかだ。